

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11073

研究課題名(和文) 親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援ガイドラインの開発

研究課題名(英文) Development of Nursing Support Guidelines for Women with Personality Disorders
Becoming Parents

研究代表者

永井 真寿美(Nagai, Masumi)

島根大学・学術研究院医学・看護学系・助教

研究者番号：50759793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援を明らかにした研究は進んでおらず、支援者の多くは、具体的な方略を持たないまま女性や家族と関わっている。そこで、本研究では、パーソナリティ障害をもつ女性に対して、看護支援の在り方を明らかにし、ガイドラインを作成することとした。先行研究「妊娠・出産・育児期にある精神障害をもつ女性とその家族への看護支援ガイドライン」の洗練化を行った。この先行研究結果と、親になるパーソナリティ障害をもつ女性へ看護支援を行ったことのある看護者へのインタビュー調査をもとに、「親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援ガイドライン」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、親子関係に課題を抱えている女性が、母親になることを受け入れつつ辿る体験のプロセスを明らかにするとともに、そのような女性に対して、自我の脆弱性を見極めつつ、母親になる過程を支援する看護介入方法を明らかにしている。看護者がパーソナリティ障害をもつ女性の自我や、妊娠・出産に関する知識レベルを査定しつつ、どのような看護支援を行っているかを明らかにし、それをガイドラインとして作成することは、今までにない独創的な研究である。

研究成果の概要(英文)：There is a lack of research that has clarified nursing support for women with personality disorders who become parents, and many supporters are involved with women and their families without a specific strategy. Therefore, this study was conducted to clarify the nature of nursing support for women with personality disorders and to develop guidelines. We refined a previous study, "Guidelines for Nursing Support for Women with Mental Disorders and Their Families During Pregnancy, Childbirth, and Childcare. Based on the results of this previous study and interviews with nurses who have provided nursing support to women with personality disorders who become parents, the "Guidelines for Nursing Support to Women with Personality Disorders Who Become Parents" were developed.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：パーソナリティ障害 親になる過程 精神疾患をもつ女性 妊娠・出産・育児への支援 看護支援 母性看護

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

精神疾患は、器質的要因や環境要因がある中で、対処しきれない大きなストレスが加わることで発症すると考えられている(南ら, 1993; 大熊, 2008)。精神障害をもつ女性は、妊娠や出産といったライフイベントに柔軟に対応できず、精神症状を悪化させ、食事や水分摂取、清潔保持といった基本的なセルフケアにも影響を受ける。女性は対人関係に困難を感じ、必要な援助を求められないことも多い。また、産科・新生児合併症への対応や、精神科医師等による専門的な管理が必要となり、周産期医療提供体制の整備が重要な課題となっている。今後、看護者には妊娠・出産・育児期にある精神障害をもつ女性の特性を踏まえ、精神症状の安定を図りながら母親としての役割を獲得することを、予防的、かつ補完的に援助することが期待されている。

このような背景から、研究者らは先行研究において、施設に所属している看護者を対象に面接調査を実施し、A 県における精神障害をもつ女性の妊娠・出産体験の特性とニーズの明確化と、精神障害をもつ女性の妊娠・出産への看護支援ガイドラインの開発に取り組んだ。その結果、女性とその家族への看護援助として、12 の大カテゴリー、27 の中カテゴリー、100 の小カテゴリーが抽出された。精神障害をもつ女性の妊娠・出産・育児への看護支援を明らかにするとともに、精神疾患別の支援方法の検討の重要性についても確認した。

菱川ら(2015)の報告によると、女性に合併した精神疾患は、神経病性障害が最も多く、感情障害を合わせると 90% を占めていた。精神疾患合併妊婦の約 25% は、精神科管理されないまま自己判断による服薬の中止や、病歴が把握されずに適切な医療につなげられないといったことが生じていた。

Rubin(1997)は、母性は胎動の自覚や腹部の隆起など、「わが子」を感じる母-子間の相補的相互関係によって発達していくものであるとし、この相互関係が母親自身と子どもが単一体である感覚を生じさせると述べている。出産後、何が自分(母親)で何が胎児であるかの区別をしていくことは、妊娠中のきずな形成より難しいと述べている。

こうした出産後の個体形成と境界形成の過程は、自我の脆弱性が特徴的なパーソナリティ障害をもつ女性にとって大きな課題となることは容易に想像できる。また、一般に女性は、出産や育児の体験のあいだ家族や社会とぐっと接近する(Rubin, 1997)が、対人関係が極端に変動しやすいパーソナリティ障害をもつ女性が、家族、社会との関係の平衡状態のバランスを保つことは難しく、特別な支援を必要としている。さらに、境界型パーソナリティ障害などは母子関係に課題を抱えている傾向にあり、ロールモデルの不在などの、妊娠・出産・育児において健康な母親とは異なる様々な困難性を抱えている。

このように、パーソナリティ障害をもつ女性にとって妊娠・出産・育児は、重要な意味をもつライフイベントである。パーソナリティ障害をもつ女性が妊娠・出産・育児を経験する際には、多くの支援が必要となるが、国内において、親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援を明らかにした研究は進んでおらず、支援者の多くは、具体的な方略を持たないまま女性や家族と関わっていたり、支援を行っても「なかなかうまくいかない」経験をし、「結局は子どもを乳児院にお願いすることになる」からと、積極的な支援に戸惑いを覚えている。そこで、本研究では、パーソナリティ障害をもつ女性に対して、看護支援の在り方を明らかにし、ガイドラインを作成することとした。

2. 研究の目的

パーソナリティ障害をもつ女性の母親になる体験を明らかにし、看護支援ガイドラインを作成することである。親子関係に課題を抱えている女性が、母親になることを受け入れつつ迎える体験のプロセスを明らかにするとともに、そのような女性に対して、自我の脆弱性を見極めつつ、母親になる過程を支援する看護介入方法を明らかにする。

3. 研究の方法

- 1) 「妊娠・出産・育児期にある精神障害をもつ女性とその家族への看護援助」の洗練化と、親になるパーソナリティ障害をもつ女性の体験の特性と構造の明確化
 - (1) 国内外の文献から妊娠・出産・育児を経験するパーソナリティ障害をもつ女性の親になる体験を抽出、分類する。
 - (2) 文献検討の結果や、研究分担者(精神看護学、母性看護学の専門家)と、先行研究の成果である「妊娠・出産・育児期にある精神障害をもつ女性とその家族への看護援助」の洗練化を行う。
- 2) 周産期医療に携わる看護者が行ったパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援の明確化
親になるパーソナリティ障害をもつ女性の体験の特性と構造の明確化(研究目標 1)と、親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援の明確化(研究目標 2)を行う。
 - (1) 育児期にあるパーソナリティ障害をもつ女性に対し、インタビューガイドを作成し半構成的面接調査を行う。1回1時間程度の面接を、1人につき2回実施する。初回面接時に語っていただいた内容をもとに2回目の面接を実施する(質的帰納的研究)。

- (2) パーソナリティ障害をもつ女性の妊娠・出産・育児への看護支援に携わったことのある看護者に対し、インタビューガイドを作成し半構成的面接調査を行う。1人1回(1時間程度)の面接を行う(質的帰納的研究)。
- 3) 「親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援ガイドライン」の作成
研究目標1・研究目標2の成果をもとに、女性の自我・知識を3レベルで想定した上で、「親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援ガイドライン」を作成する。

4. 研究成果

1) 「妊娠・出産・育児期にある精神障害をもつ女性とその家族への看護支援ガイドライン」
先行研究の結果から、看護者、女性とその家族が相互に安心できる距離での援助関係の形成、多職種による継続的な支援体制の整備が、女性が自分のペースで親になる過程を辿るのを支えるのに重要な看護援助であることが示唆された。この結果をもとに、12の看護支援を主軸に、「妊娠・出産・育児期にある精神障害をもつ女性とその家族への看護支援ガイドライン」を作成した。看護者は、妊娠・出産・育児による生活の変化に備えて、丁寧に準備し、その家族に適した支援者ネットワークを作り出すために奔走していた。また、育児が加わり変化した生活に困難さを感じていないかを捉え、睡眠が確保できるよう育児体制を整える、女性の苦悩を受け止め、ともに考える、女性なりのペースで親になる過程を見守るといった看護支援を行っていた。時には、児の養育が難しくなる場合もあるため、看護者は児の安全確保を優先しながら、家族のかたちに合わせて親役割獲得・遂行を促していた。

2) 周産期医療に携わる看護者が行ったパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援の明確化
新型コロナウイルス感染症流行拡大のため、研究協力施設、研究協力者の確保は困難を極めた。脆弱性をもつパーソナリティ障害をもつ女性とその家族にとって、新型コロナウイルス感染症流行に伴う健康不安や生活様式の変化は、生活の安寧を脅かしたり、家族危機に陥る可能性をもたらすものであると考えられた。また、周産期医療提供体制は長期間にわたり危機的な状況が続いた。そのため、妊産婦、医療従事者双方の安全を守るため、感染拡大期には積極的なインタビュー調査の実施は控えた。感染者数が減少し、周産期医療提供体制が安定している間に、親になるパーソナリティ障害をもつ女性へ看護支援を行ったことのある看護者5名にインタビュー調査を実施した。その結果、周産期医療に携わる看護者が行っているパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援の特徴が明らかになった。看護者は、女性との【信頼関係の築きにくさ】を認識しており、外来看護体制下では、複数の看護者が女性を担当するが、女性がとるコミュニケーション方法を捉え、女性と安定した援助関係形成に向けて関わっていた。また、女性の【生活の中で生じる困難を捉えにく(い)】さや、【変化することの受入れ難さを認め(る)】、出産・育児を経て変化する生活や、家族関係に対して備えていけるよう、妊娠早期から、多職種と協働し支援していた。

3) 「親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援ガイドライン」の作成

先に述べた、研究者らが開発してきた「精神障害をもつ女性の妊娠・出産・育児への看護支援ガイドライン」の要素と、本調査で明らかになった看護支援の特徴を踏まえ、「親になるパーソナリティ障害をもつ女性への看護支援ガイドライン」の作成に取り組んだ。

看護者は、妊娠中からの継続支援の必要性を認識しており、産科医師、精神科医師、小児科医師、保健師、NICU看護師、ソーシャルワーカーなどと連携して支援体制の構築に取り組んでいた。そして、女性が親になる過程を支えながら、育児を優先し睡眠時間が確保できず健康状態に不調をきたす場合には、育児方法を調整し女性が休息を取れるよう調整を行っていた。女性は子どもや育児の状況変化を捉え、家族や支援者とコミュニケーションを図り育児方法を工夫することにも困難を抱えていた。看護者は、女性は気分が変調しやすいことを捉えており、今どうにかしようとするばかりでなく、入院期間中を通して育児技術を獲得できるようにするなど、女性とその家族が時間的余裕をもって育児に取り組めるよう支援していた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田井 雅子 (Tai Masako) (50381413)	高知県立大学・看護学部・教授 (26401)	
研究分担者	嶋岡 暢希 (Shimaoka Nobuki) (90305813)	高知県立大学・看護学部・准教授 (26401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関